

東白川村越原（おっぱら）における里山の保全と自然体験への活用

森と木のクリエイター科 森林環境教育専攻 野田 恭子

1. 研究の背景

これまで、「国・世界レベルのルール（法律・条約）や予算が動けば世界は大きく変えられるはず」との思いから、環境省や国際条約の事務局で生物多様性保全の仕事をしてきた。しかし実際に仕事をして実感したのは、ルールや予算は大きな変化を起こせるツールではあるが、最も大切なことはそれらを活用した「地域レベルでの保全活動」であるということだった。

また、そうした地域での活動を進めていくには、意思決定し行動する「ひとりひとりのあり方」が重要であることも実感した。この「ひとりひとりのあり方」については、合気道を習ったことを契機に「思考と身体感覚のバランス」が重要であり、それがものごとと向き合う姿勢と大きく関係すると考えるようになった。

思考にバランスが傾きすぎると、身体感覚（本音・本質）を思考でごまかしたり、近視眼的・対症療法的なアプローチになりやすく、複雑な現実世界を単純化してしまうことで、現実にもぐわぬ判断をしてしまう場合がある。環境問題や林業の問題も、長期的・総合的な視点より、目先の経済性・効率性に目がいきがちなことと大きく関係している。IT が発達した昨今、このバランスはさらに思考側に傾きがちといえよう。

都市のように言語化・記号化されていない、変化に富んだ自然空間、すなわち多様な植生や景観を有する里山のような空間に身をおき、思考だけでなく身体や感覚を総動員する自然体験活動は、思考側に偏ったバランスを健康的な状態に引き戻すのに有効な方法のひとつと考えられる。

以上のように、持続可能なよりよい社会を作ってゆくためには、生物多様性保全などの「地域レベルでの取組」が重要であり、そうした意思決定や行動をするひとりひとりが自然体験等により「思考と身体感覚のバランスを取り戻す」必要があると実感した。このことから、卒業後は東白川村において里山保全・自然体験活動等を行う予定であるが、活動予定地である越原（おっぱら）にある森林は、まだ植生の詳しい状況がわかっておらず、今後の管理・活用方策も決まっていない状態であった。

2. 研究の目的

そこで本研究では、森林の現状を明らかにして、その保全や自然体験への活用を進めていくため、①植生

調査を行い、②今後の管理方策の検討・③自然体験への活用の検討を行い、④自然体験活動を試行することでプログラム実践経験を積み、期待される効果（思考と身体感覚のバランスを取り戻す）が得られるかを確認することとした。

2. 調査地と方法

（1）植生調査

【調査地の概要】：岐阜県加茂郡東白川村越原地内の 8ha の森林で、5 つの飛び地からなる（南側から A～E とする）。標高は南側から北側にかけて約 500～700m で、地質は濃飛流紋岩である。

【調査方法】：

- 特徴的な植生がまとまってみられる場所では半径 5.6m（約 100 m²）の円形の調査区を設定し、毎木調査を行った（11ヶ所）。
- 特徴的な植生が狭い範囲にある、調査区と類似の植生の場所等は、群落の特徴を記録した（6ヶ所）。調査地は OP1～OP17 と名付けた。森林への関心や理解をより深めてもらうため、地権者・管理者にも調査に参加してもらった。

（2）保全・管理方策の検討

①植生調査結果、②地権者・管理者の意見、③文献調査をもとに、里山の保全や自然体験への活用に向けた森林の保全・管理の方法を検討した。

（3）自然体験への活用の検討

- 植生調査の結果から、自然体験に活用できそうな資源（場所、植物）を明らかにした。
- 上記の資源や地権者・管理者の意見、自分のできることを総合し、可能性のある活動を検討した。

（4）自然体験活動の試行

- 学内で自然体験プログラムを試行し、アンケート調査により期待される効果（思考と身体感覚のバランスを取り戻す）が得られるかを確認した。

3. 結果

（1）植生調査

南端の飛び地 A では、下表のとおり多様な植生がモザイク状に存在していることがわかった。

飛び地 B、C、D、E についてはヒノキ林が主体で、部分的にアカマツ（主に尾根沿い）、スギ（飛び地 E の主に沢沿い）もみられた。ヒノキの胸高直径は 10

～40cm（平均約 20cm）、群落高は 15～25mであった。相対幹距比は 10～17%で、ヒノキ人工林としては過密な状態であった。

飛び地 A で見られた植生

植生	場所
ヒノキやコウヤマキ (DBH10-40cm)	OP4, 7
ヒノキを広葉樹が侵食(クリ, コナラ等)	OP10
アカマツ (DBH30-60) と広葉樹・モミ	OP3, 9
広葉樹・針葉樹の大径木 (DBH40-60cm)	OP2
もとから自然度高い, 落葉広葉樹主体	OP5, 6
ヒノキ林にタケが侵入	OP16, 17
開けたササ原	OP15

調査に参加した地権者・管理者からは、「調査に参加することではじめて森の奥まで入ることができ、様子を知ることができた」「森のことに真剣に取り組んでいるアカデミーの学生との交流に刺激を受けた」などの感想が聞かれた。

(2) 保全・管理方策の検討

文献調査、地権者・管理者との意見交換を踏まえ、下記の保全・管理方針を立てた。

- 森を健康的にすること、生物多様性を高めることを基本方針とする。
- 人工林として管理する部分、広葉樹等の森林に誘導し生物多様性を高めていく部分、自然体験に活用する部分など、ゾーニングして管理する。
- 広葉樹林等（モミなど一部針葉樹を含む）に誘導する場所は、現存の植生や埋土種子を生かし、できるだけ多様な樹種の森とし、大部分が人工林となった当該地域の在来種のシードバンクとする。

具体的な管理方法の提案は、下表のとおりである。

区分	管理方法	場所
人工林	間伐により適正密度に (ヒノキ, コウヤマキ, スギ)	B, C, D, E OP4, 7
広葉樹 育成	生育不良ヒノキを伐採、 ササ刈りで後継樹を育成	OP3, 9, 10 周辺
沢沿い等	そのまま	OP5, 6 等
竹林	間伐により適正密度に	OP16, 17
空間利用	人が多く入る場所は限定	OP2, 15

(3) 自然体験への活用の検討

植生調査結果からわかった自然体験に活用可能な要素は下表のとおりである。

活用目的	活用可能な要素
空間利用	平坦で開けた OP2, OP15 や OP3 歩道
草木染	クリ, ソヨゴ, サルトリイバラ等
食用	コシアブラ, タカノツメ, マダケ等
蔓工作	フジ, アオツツラフジ

竹工作	ハチク, マダケ
木工作	間伐材 (広葉樹・針葉樹)
木材	ヒノキ, コウヤマキ, スギ, アカマツ
薪炭・農業資材	間伐材, 刈ったササ

また、地権者・管理者との意見交換を通じて、「間伐材や刈られた草など不要となったものを生かす活動」や、「都会生活になじめない人も自然の中で活躍ができる可能性」などが挙げられた。

これらを総合すると、下記の理由から、効果的な活動のひとつとして草木染が考えられた。

- 過去に染織をやっていた経験を生かせる。
- 「不要となったものを生かす活動」として、里山管理の結果出た素材を、染料だけでなく煮染め用の薪、草木灰（染色助剤）としても使える。
- 植物の探索、観察、採集、薪づくり、デザイン、火起こしなどの多様な体験を含むことから、「思考と身体感覚のバランスを取り戻す」という目的に最適であり、「都会生活では発揮しにくい参加者の多様な特性が生かされる」可能性が高い。

(4) 自然体験活動の試行

草木染ワークショップを実施し、大人 6 名が参加した。参加者のアンケートでは、「自然物に触れ、香りや色の変化を体感する心地よさや驚きを感じられた」「頭が疲れなかった」「みんな自然体で『こうあるべき』というのがなくとても楽しくやれた」「様々な活動があり、皆の特徴が生かせて楽しめた」等の回答を得た。

5. 考察

本研究により、越原の森林の植生の現状が明らかとなり、今後の管理の方針を立てることができた。調査に参加してもらうことで地域関係者の理解や関心をより深めることもできたと考えられ、未着手だった森林保全・管理への第一歩を踏み出すことができた。また、自然体験に活用可能な要素が明らかとなり、草木染ワークショップのアンケート結果からは、参加者が思考から感覚へのシフト、思考優位で陥りがちな「こうあるべき」という縛りから自由になること、現代社会で求められがちな特定の分野の能力以外に個々の特性に応じた多様な能力が発揮できる効果を感じたことがうかがえたことから、期待される効果が得られたことが確認できた。

今後は、研究結果を踏まえ、地域関係者の理解と協力のもと、里山の保全・活用を実践してゆく予定である。こうした取組みは、里山保全のモデルケースの蓄積に資するほか、世界目標「30 by 30」や森林空間活用の促進にも貢献すると考えられる。